



scenic harmony

## summary

モダニズム期では、インターナショナルスタイルの確立によって、建物と周辺環境との調和は軽視されがちであった。しかし、現代建築は個を豊かに表現しつつ、その場所性から何か何か攝取して協調させようとする姿勢へと変化している。

一つは風景の中の建築という見方である。

これは、建築の外観が視覚上の重要な要素となっており、外観と風景の関係により、その場の景観が作られている。



二つめ建物内部から見える風景である。

これにおいては建物の内部空間の構成や開口が、そこから見える風景の見せ方に影響を及ぼす。



今回は二つめの建物内部と開口部、そして風景を見ることによって、風景と建物の関係の一端を明らかにする。

建物の内部空間と開口部を構成している線分によって4つに分類する。

### 1. 建物の内部空間において垂直線が主張しているもの

内部空間において、垂直線が支配的であり、外部の風景が同様に垂直線によって構成されている場合、双方の調和を見ることができる。

那須歴史探訪館では周囲に竹林が広がっている。垂直方向に視界が続くことにより建物内部からの連続性が生まれている。

一方、垂直線以外の線分によって構成されている風景においては、この空間との対立が生じている。神流町立中里合同庁舎では垂直な壁や開口部の中で山の輪郭線のみが異質な線として取り出され、強調されている。

### 2. 建物の内部空間において水平線が主張しているもの

内部空間において、水平線が支配的であり、外部の風景が同様に垂直線によって構成されている場合、双方の調和を見ることができる。

勝山跡ガイダンス施設では内部空間に水平線が多く、風景も樹木の輪郭によって端から端まで水平な線が通っている。これにより建物内部に水平方向の広がりや開放感が作り出される。

一方、垂直線により構成されている風景は、この空間との対立が見られる。江山閣から見える風景は樹木の幹が強く見えている。

### 3. 建物の内部空間において斜線が主張しているもの

内部空間において、斜線が支配的であり、外部の風景が同様に斜線によって構成されている場合、双方の調和を見ることができる。

高根町ふれあい交流ホールでは、緩やかな水平に近い斜面の山並みが、開口部の水平に近い斜面と調和して見える。

一方、斜面以外の線分で構成されている風景は、斜線で構成された内部空間とは対立すると考えられる。

### 4. 建物の内部空間において曲線が主張しているもの

内部空間において、曲線が支配的であり、外部の風景が同様に曲線によって構成されている場合、双方の調和を見ることができる。

冥想の森では山並みの緩やかな曲線を壁紙の曲線を用いて表わしており、内部空間と風景の調和が見られる。これにより、離れている山並みとの連続性が生み出されている。

一方、曲線以外で構成されている風景は曲線で構成された内部空間とは対立すると考えられる。

以上より、線の種類の組み合わせによって建物の内部空間と風景に調和や対立が生まれる。風景と同様の線を用いることで風景と内部空間は調和し、これらの境界が曖昧になり視覚的な連続性を生むことができる。また、異質な線を用いることで風景と内部空間が対立し、風景は異質な線として強調させる効果を生んでいると考えられる。

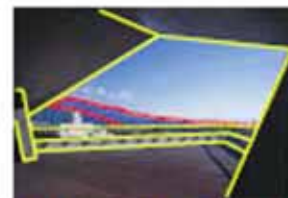
これらの結果を用いて、次章より風景を軸にした設計を行う。



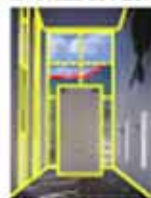
那須歴史探訪館



勝山跡ガイダンス施設



高根町ふれあい交流ホール



神流町立中里合同庁舎



江山閣



冥想の森



## site

計画敷地	長野市黒瀬水
用途地域	ギャラリー付住宅
敷地面積	2000 m <sup>2</sup>
容積率	100%
建築率	60%

市街地より北に車で10分ほどのところでは坂がきつくなりつつも、善光寺や信濃美術館があることで、観光客が訪れにぎわいを見せている。

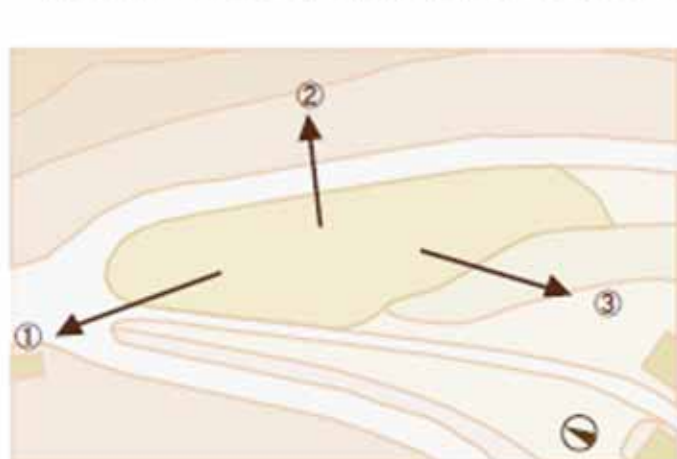
本敷地はそこから少し大幡山を登ったところに位置し、樹木が生い茂り、市街地とは全く異なる空間が存在する。しかし、ここを訪れる人は少なく、車の通り道でしかない。

そこでここにギャラリー付住居を設計する。気軽に立ち寄れるギャラリーを通し、山岳風景と建物の新たな関係の一端を示す。



## site study

本設計において周辺の環境や風景は大変重要なものである。そこで、本敷地から望める風景を



## composition

敷地考察によって得られた、周辺環境・風景の見え方・風景の構成している線などを参考にギャラリーと住居との関わり方を検討する。

①



本敷地の北側の風景は複数の山並みが重なってできており、曲線によって構成された風景となっている。  
近くの山並みから遠くの山並みまで見ることができる。距離がありながらも山並みの重なりによって連続している。

②

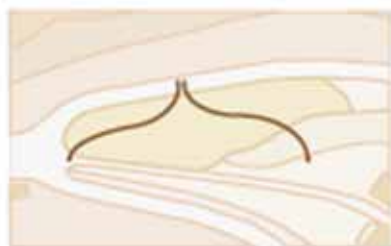


本敷地の東側は多くの広葉樹が生い茂っている。この樹木全体の輪郭線は水平線を作り出している。したがってこの風景は水平線で構成された風景に分類する。

③



本敷地の南側には多くの高さのある杉が林立している。ここでは主に杉の幹が視覚的な特徴を与え、空間を構成しているため、垂直線で構成された風景に分類する。  
また、複数の幹が見えることで、奥行きのある空間が視覚上で感じられる。



敷地考察によって視点場と得られる風景が定まった。それらを参考に上図のように動線を確保する。



敷地から見える風景を考慮してへの字型にギャラリーを配置する。  
これによって、大きく3つの場ができ、それぞれ曲線、水平線、垂直線を主張した空間が作れる。



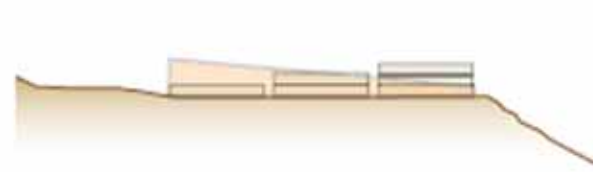
右下図のようにギャラリーを取り巻くように住居を配置する。これにより、建物全体は一つの塊ようになる。



本敷地は東西が山に挟まれ、南は斜面になっているという起伏の激しい場所である。  
しかし、本敷地のみ水平な場所となっている。

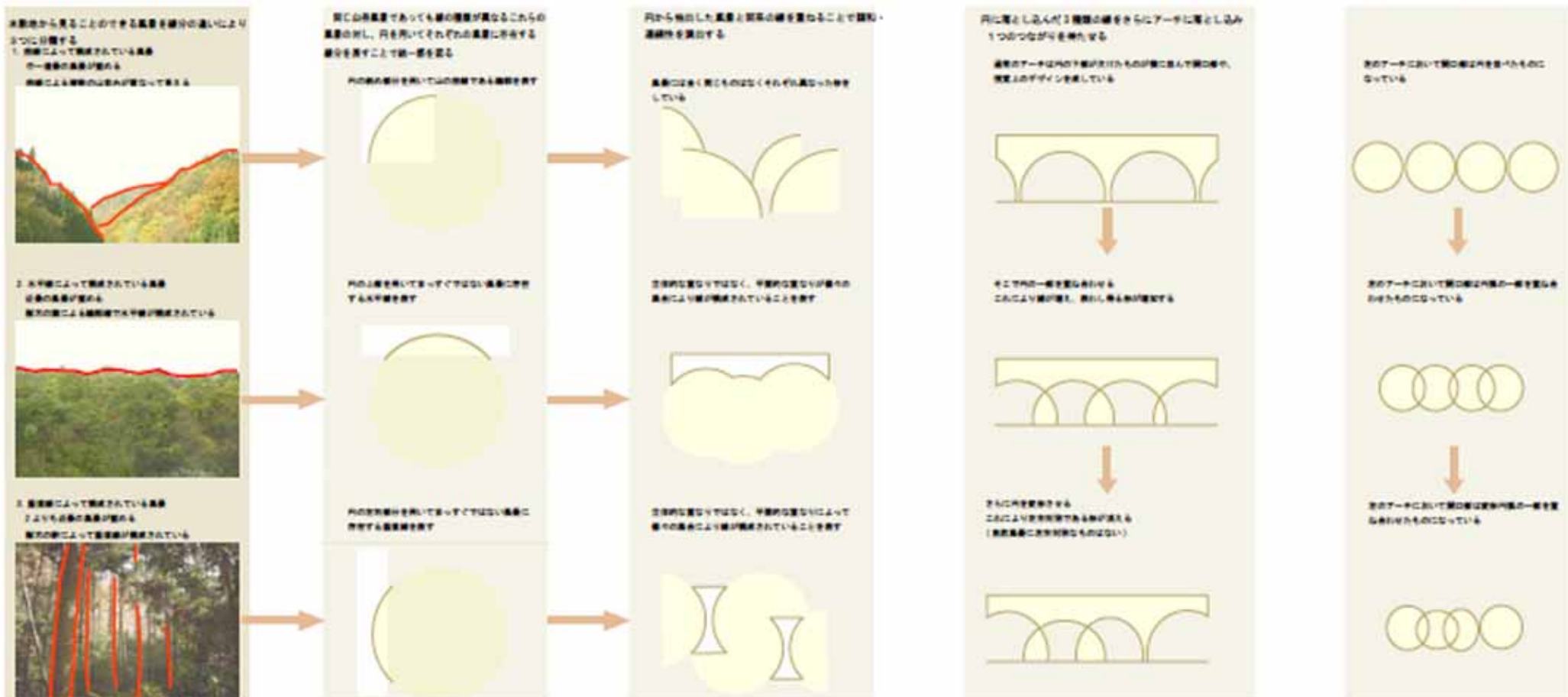


周辺地形を取り入れる。  
南側の斜面を取り入れ、ギャラリー全体をスロープで構成し、斜面を作る。これにより、風景への視線の流れや、動線を作り出す。



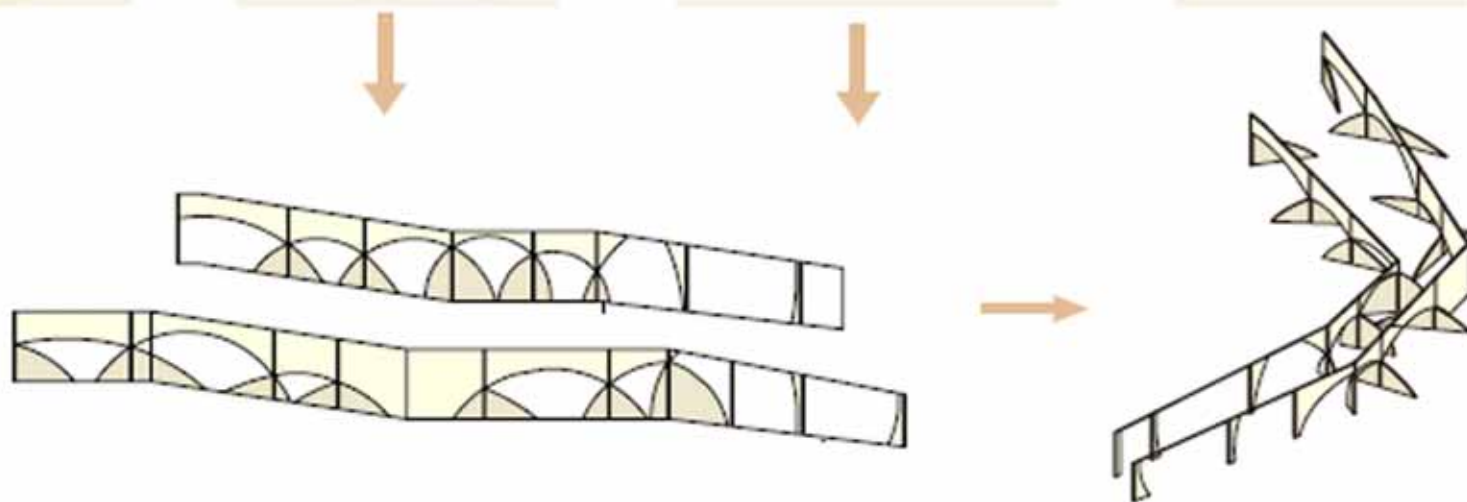
ギャラリーを中心に住居を配置する。  
この時、各スラブにレベル差・階層差をつけることでプライベートを守ることができると共に、各住居に特徴がつけられる。

# concept

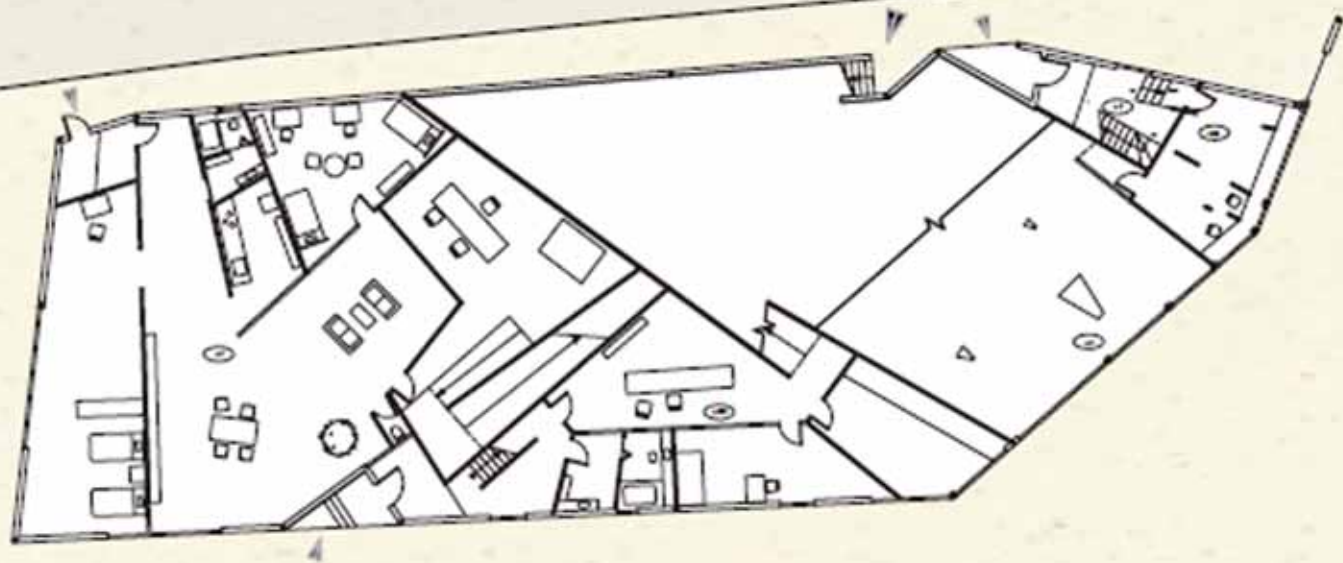


## 展開図 ギャラリー部分の柱と梁

窓以外の部分である壁は柱を軸に回転させることができる  
 よって、壁による視線の方向と梁による視線の方向の2つができ、視点場によって開口部から異なる風景が望める。

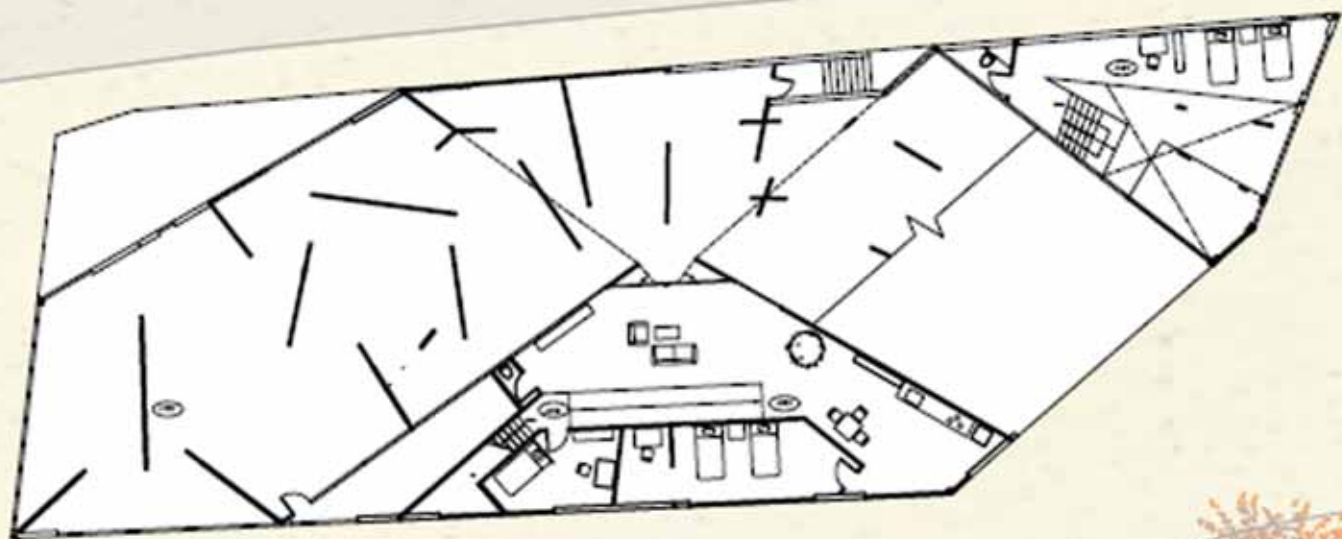






PLAN 1F 1:200

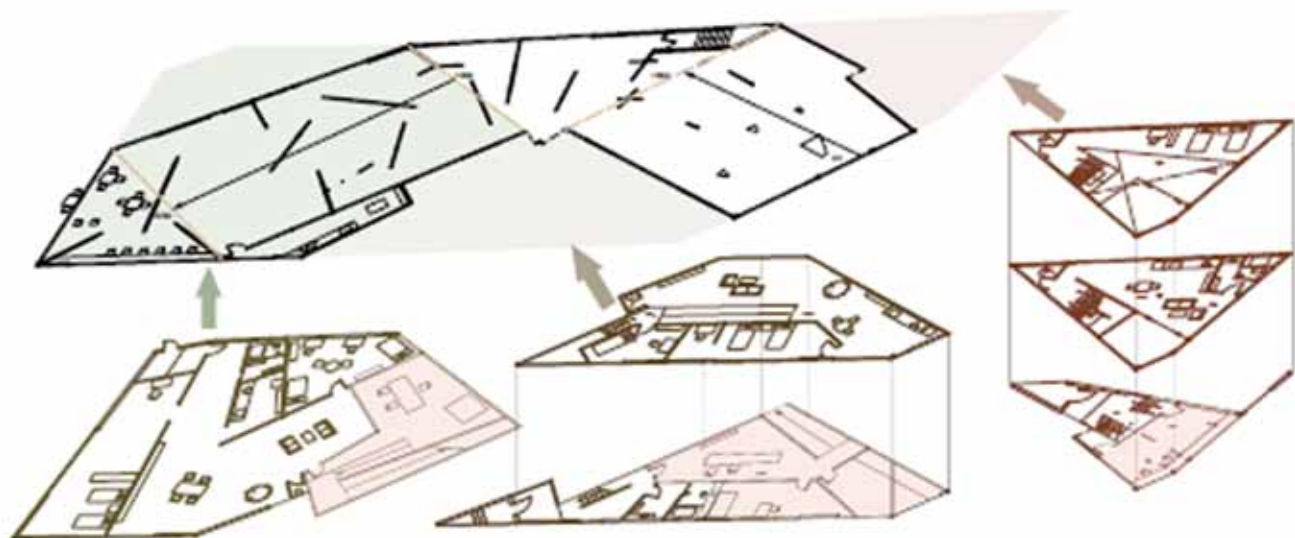




PLAN 3F 1:200

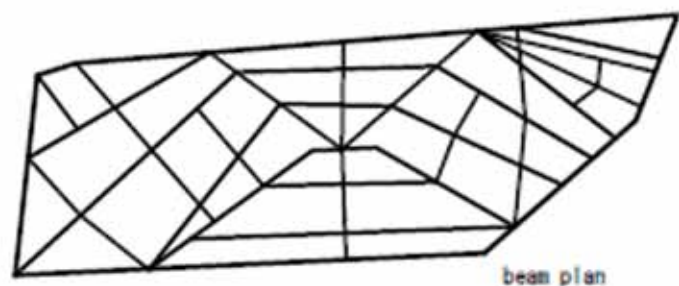
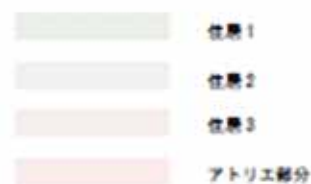


PLAN 2F 1:200

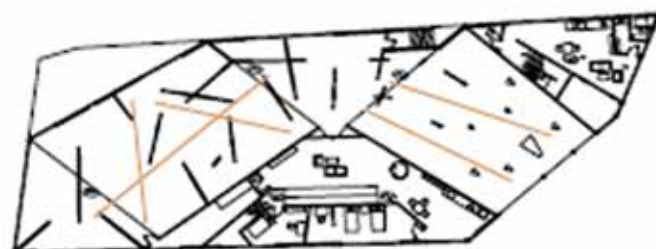


ギャラリーと住居、アトリエの関係は上図のようにになっている。住居とギャラリー間はアトリエを通らなければならない。しかし、住居からギャラリーへの視線は通るように計画した。また、北側は上階と下階では用途が全く違うため、空間の構成も異なる。

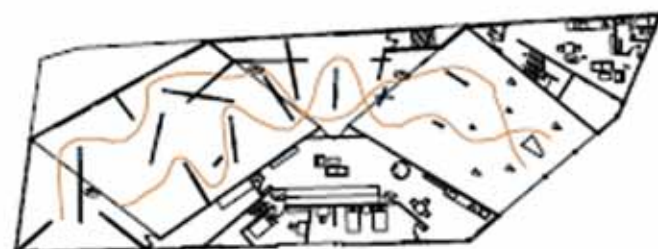
しかし、アーチによる通りと抜けの特性を用いることで、住居における、通りの強い部分・弱い部分を作ることができた。ギャラリーでは一つの大きな空間で様々な特徴をもった場所を設けることができ、展示物によって、使い分けができるのではないかと考える。



ギャラリー全体をアーチで構成することでひとつながりの梁が生まれる。このギャラリーを取り巻くように住宅を配置することで住宅同士でひとつながりの梁が生まれる。したがって、上図のように、六角形で構成されたような梁伏せとなる。



ギャラリー内には壁や梁などで視線が区切られている。しかし、場所によって視線や動線の通る場所がある。上の図は主な視線、動線の通る道である。

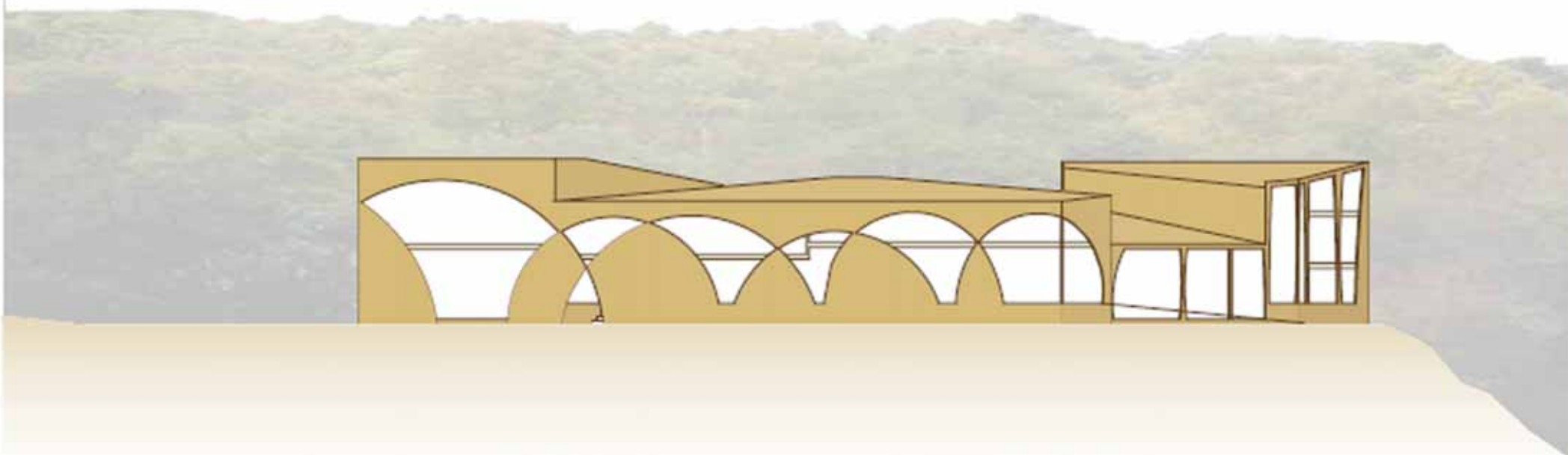


ギャラリー内に基本的な通路や方向はなく、様々な動線が存在する。また、死角となる空間があることで次の作品が気になったり、目にとまった作品へ足を運んだりすることができる。





a-a' section 1:200



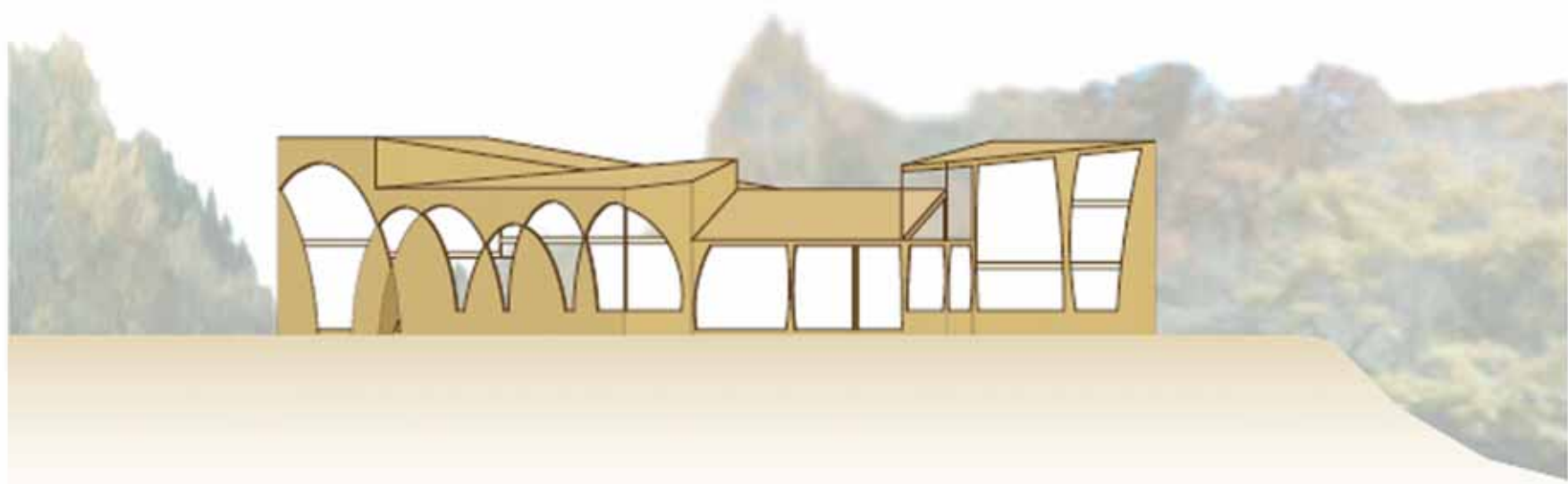
west elevation 1:200



b-b' section 1:200



c-c' section 1:200



south elevation 1:200

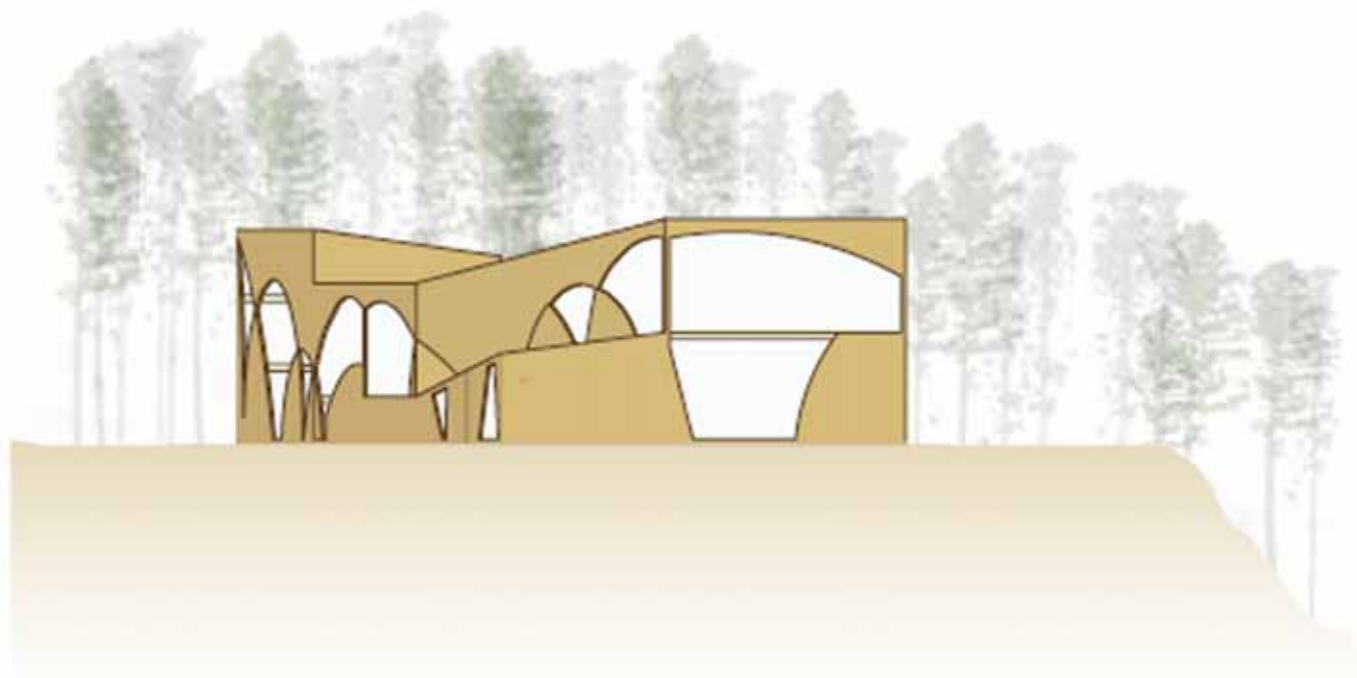
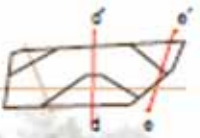




d-d section 1:200



e-e section 1:200



north elevation 1:200



北側では曲線で構成された壁が幾重にも重なって、様々な動線と視線の通り道を生んでいる。作品の展示の方法によって、一定の動線を作り出すこともバラバラな動線を作り出すことも可能である。スロープを上っていくことで、風景として存在する本物の山に近付くが視線の通りによっては近づいても確認できない。反対に視線の抜ける場所では遠くても山がよく見える。



南側ではアーチによる垂直に近い柱で構成されている。北側よりも天井高を抑えていることで樹木による囲まれ感、薄暗さも取り入れている。作品がいろいろな高さの場所で展示されていることで縦へと視線が動く。

### ギャラリー

3人の作家の作品を展示する  
画家・陶芸家・ガラス作家

この動きと視線が通る空間が多いことが、低さや閉塞感を感じさせない。また、斜面を下っていくことで杉林の中へと入っていく感覚を得られる。





## 住居 1

想定家族構成

大人 2人

子ども 2人

北側に配置する住居1はアーチをひっくり返したような壁を用いる。この壁を重ねることで山並みとの連続性を図る。また、立面的に見える壁のカーブを用いて視線の抜けと廻りを操作する。アトリエとリビングの関係を近くすることによって、家族のコミュニケーション時間が増える。

## 住居 2

想定家族構成

大人 2人

子ども 1人

南西側に配置する住居 2 はアーチで構成された水平線を梁や壁に用いる。また、スラブのレベルを変えることでギャラリー内部とアトリエ内部を望めるように計画する。よって住居 2 内部の水平要素、ギャラリー内部の水平要素を介して水平で構成された風景を眺めることができる。








### 住居 3

想定族構成

大人 2人

南側に配置する住居はアーチで構成された垂直線を梁や壁に用いる。複数本のこの柱を通して風景を見ることで外部との連続性を図る。また、視線が上下に抜けるように計画し、高さを出すことで垂直方向を強調する。



special thanks☆

kubo kazuki kan (B3)

matsumoto wataru kan (B3)

takenouchi fumi awa (B2)

hiraiwa hiroki kan (M2)

obinata yuka kan (M1)

sakurai aimi kan (M1)

kato hikaru kan (B4)

tanaka kuniyuki kan (B4)